

A large red graphic of a flag with a wavy top edge and a small red emblem at the top left corner. The emblem is a stylized, elongated shape with a pointed top and a small opening at the bottom, resembling a traditional Chinese tassel or a specific symbol.

中国の社会主義
文化大革命

(第七集)

北 京 外 文 出 版 社

中国の社会主義文化大革命

(第七集)

外文出版社

北京

目次

プロレタリア文化大革命の綱領的文書……………	『紅旗』社説（一九六六年第十号）…	5
文化大革命の思想的武器を掌握しよう……………	『人民日報』社説（一九六六年八月十一日）…	13
十六カ条を学習し、十六カ条に精通し、十六カ条を運用しよう……………	『人民日報』社説（一九六六年八月十三日）…	16
大海を航行するには舵手にたよる……………	『人民日報』社説（一九六六年八月十五日）…	19
革命的な青少年は解放軍に学ばなければならない……………	『人民日報』社説（一九六六年八月二十八日）…	22
闘争の大きな方向をつかもう……………	『紅旗』社説（一九六六年第十二号）…	26

プロレタリア文化大革命の綱領的文書

『紅旗』社説

(一九六六年第十号)

わが国のプロレタリア文化大革命の発展にとってカギとなる時機に、中国共産党中央委員会は『プロレタリア文化大革命についての決定』を発表した。この文書は、毛沢東同志がみずから中心となつて、ここ数ヵ月におけるプロレタリア文化大革命の大衆運動の経験を科学的に総括してつくりあげたものである。これはわが国のプロレタリア文化大革命の綱領である。この決定は、かならず、わが国のプロレタリア文化大革命の運動を新たな高まりに向かつて前進させるであろう。

この決定は、わが国のプロレタリア文化大革命の性質、情勢、任務を正しく分析して、この大革命における党の方針と政策を定めている。

決定は、「いまくりひろげられているプロレタリア文化大革命は、人びとの魂にふれる大革命であり、わが国社会主義革命のより深く、より広い、新たな発展段階である」とのべている。

毛沢東同志は、十年まえ、わが国で生産手段所有制の社会主義的改造が基本的になしとげられたとき、英明にもつぎのようになされた。階級闘争はまだおわつてはいない。プロレタリアートとブルジョアツトのあいだの

階級闘争、各政治勢力のあいだの階級闘争、プロレタリアートとブルジョアジーとのあいだのイデオロギー面での階級闘争は、やはり長期にわたる、曲がりくねったたたかいであり、ときにはひじょうに激しいものでさえある。プロレタリアートは自己の世界観にもとづいて世界を改造しようとし、ブルジョアジーも自己の世界観にもとづいて世界を改造しようとする。この面では、社会主義と資本主義とのあいだの、どちらが勝ち、どちらが負けるかの問題は、まだほんとうには解決されていない。」

プロレタリア文化大革命は、わが党の指導のもとに大衆を十分に立ちあがらせて、毛沢東同志が提起したイデオロギーの面でのどちらがどちらにうち勝つかの問題をいかに解決していくためのものである。

この文化大革命は、プロレタリアートの世界観とブルジョアジーの世界観との闘争であり、プロレタリアートとブルジョアジーのイデオロギー分野における指導権争奪の闘争である。

すべての階級闘争は政治闘争である。この文化大革命は、とどのつまり、社会主義制度と資本主義制度との食うか食われるかの闘争であり、プロレタリアート独裁をうち固めようとする力を一方とし、プロレタリアート独裁をブルジョアジー独裁に変えようとする力を他方とする両者のあいだの闘争である。これは、きわめて激烈で、鋭く、深刻な階級闘争であり、プロレタリアートが資本主義の復活を防止する闘争であり、わが国が帝国主義と現代修正主義による転覆の陰謀と「平和的転化」を防止する闘争である。これは、われわれの偉大な祖国の前途にかかわる闘争である。

決定のなかで指摘されているように、現在おこなわれているこのプロレタリア文化大革命の任務は、第一に、資本主義の道をあゆむ実権派を闘争によってたたきつぶすことであり、第二に、ブルジョアジーの反動的学術

「権威者」を批判し、ブルジョアジーとすべての搾取階級のイデオロギーを批判することであり、第三に、教育を改革し、文学・芸術を改革し、社会主義の経済的土台に適應しないすべての上部構造を改革することである。

いま、わが国のプロレタリア文化大革命はひじょうにすばらしい情勢にある。それは、わが国の政治、経済の各分野が活気にみちあふれて発展していることであらわれである。中国共産党に指導されたこの史上かつてない文化大革命のなかで、各階級の関係、各政治勢力の関係には、新たな変動がおこっている。大衆運動が真にもりあがっているところでは、怒とうのような勢いであり、破竹のような勢いである。広範な労働者・農民・兵士、革命的知識人、革命的幹部は、革命の奔流に身を投じており、ブルジョアジーの反動的なとりではつきつきとたたきつぶされている。これが文化大革命の主流である。だが、運動を阻害する力はいまのところまだかなり大きく、がん強であることを見っておかなければならない。多くの地方や部門は、動き出したように見えてまだ動き出してないか、あるいは比較的ひっそりとした状態にあり、階級闘争のフタがまだ完全にはあけられていないか、あるいはまったくあけられていない。一部の地方や部門では、曲折があらわれ、反復があらわれている。その責任者、あるいはそこへ派遣された工作班の責任者は、方向のうえでの誤り、路線のうえでの誤りをおかしている。これらの責任者は、自分を批判する大字報をはり出した大衆にたいして反撃を組織しており、はなはだしいばあいには、自分の部門あるいは工作班の責任者に反対することは党中央に反対することであり、反党・反社会主義であり、反革命であるなどというスローガンをうち出している。かれらは、闘争のほこ先を真に革命的な積極分子に向けて、革命的左派を包囲攻撃し、革命の大衆運動をおさえつけている。だが、プロレタリア文化大革命はとどのつまり大勢のおもむくところであって、はばみえないものである。大衆を十分に立ちあがらせ

さえすれば、このような阻害する力は急速にたたきつぶされてしまう。曲折と反復を経て、運動はいっそう活気にみちた、いっそう健全な道をあゆむであろう。

わが党の任務は、この大革命を敢然と指導し、りっぱに指導することである。党の指導の決定的なカギは、「敢然」ということをなによりも念頭におき、思いきって大衆を立ちあがらせることにある。

敢然と大衆を立ちあがらせるかどうかは、他の革命運動にたいする態度と同様に、このプロレタリア文化大革命を指導することができるかどうかの根本的な基準である。

（この決定をつらぬいている精神は、大衆を信頼し、大衆に依拠し、大衆の創意性を尊重するということである。「恐ろしい」ということをすて去らなければならない。大いに意見をのべさせることや、大字報、大討論を恐れてはならない。騒ぎがおこることを恐れてはならない。「恐ろしい」ということは、とどのつまり、大衆が恐ろしいということである。どのような人でも、もし「恐ろしい」ということをすて去らないなら、この革命運動を指導することはできず、はなはだしいばあいには大衆運動の足手まといにさえなるであろう。）この大革命運動のなかで、大衆に自分で自分を教育させ、自分で自分を律しさせ、自分から革命に立ちあがらせなければならない。革命闘争のなかで、大衆になにが正しく、なにが誤っているかを見わけさせ、どのやり方が正しく、どのやり方が正しくないかを見わけさせなければならない。革命の秩序は、あらかじめならかのワクを設ければつくり出せるというのではなく、大衆が自分の闘争の経験にもとづいてうち立てるようにさせなければならない。

毛主席はつねに、「大衆こそ真の英雄であり、われわれ自身のほうが、とかくこっけいなほど幼稚であること

を知らなければならず、この点を理解しなければ、最低の知識もえられない」とわれわれに教えている。大衆の生徒とならなければ、大衆の先生となることはできない。プロレタリア文化大革命のなかで、一部の同志はこの点を忘れていく。かれらは、いつも、自分が聡明であると思いついで、大衆が聡明であるということを信じない。実際には、広範な大衆だけが真に聡明なのである。大衆はわれわれに多くのことを教えることができる。われわれはかならず、かれらのいうことに耳をかたむけ、かれらの経験、願望、批判を学び、理解し、それらを集めて、かれらの必要としているものすべてをまとめたうえで、それを政策にしあげて、かれらのところへ返さなければならない。大衆に教えるを請わなければ、どのような指導者であれ、いかなる知識もうることはできない。

プロレタリア文化大革命運動のなかでは、文化革命班、文化革命委員会等といった多くの新しい事物があらわれた。これらは、だれかが空想でつくり出して、むりやり大衆におしつけたものではなく、大衆が文化革命運動のなかでみずからつくり出したものである。毛主席と党中央は、大衆の経験を総括して、それらが偉大な歴史的意義をもつ新しい事物であることを、この決定のなかで確認した。

これらの新しい事物があらわれたとき、最初は、人びとから重視されず、制圧や攻撃さえ受けた。新しい事物にたいする態度は、大衆にたいする態度、革命にたいする態度、革命的な大衆運動にたいする態度でもある。

毛主席は、つぎのようなすぐれた指摘をしている。「大衆のなかには、きわめて大きな社会主義的積極性がひそんでいる。革命の時期にもきまり通りにしか動かない人間は、こうした積極性がまったく目に見えない。かれ

らはめくらであつて、その目のまえにあらわれているのは一面の暗黒だけである。かれらは、時にはまったく是非を転倒させ、白黒を混同するほどである。われわれが出あつたこうした人間はまだ少ないとでもいうのだろうか。きまり通りにしか動けないこうした人間は、いつも人民の積極性を過小評価する。なにか新しい事物があらわれると、かれらはいつも賛成せず、まずわつと反対する。そして、あとになってから頭をさげ、すこしばかり自己批判をする。そして、つぎの新しい事物があらわれると、かれらはまたもやこの二つの態度をひと通りくりかえす。以後、さまざまな新しい事物があらわれるたびに、すべてこの方式で処理する。こうした人間はいつも受け身であり、重大な時点にさしかかると、いつも足踏みばかりしていて、他人に背中をどやしつけられてから、やつと一步を踏みだすのである。一

一部の同志のあいだには、高いところに立つことに熱心で、大衆から浮きあがるという大きな危険がある。かれらは、名もない若輩や敢然と突進する若武者にくらべると、政治的、思想的にずっとおかれている。だが、かれらは自分自身を「下等な人びと」の頭上にあぐらをかく貴族だと考えており、なにからなにまで一手にひきまうけ、なんでも命令をくだし、大衆をひつそりと静まりかえらせておくことだけに手なれている。かれらは、しばしば、大衆から浮きあがり大衆を恐れることから、大衆に反対し大衆を制圧するまでになる。かれらは、しばしば、革命のあらしのまえにふるえあがつて、どうすればよいのかわからなくなるが、すこしでもおびえがおさまると、待ちきれなくなつて革命運動を逆もどりさせようとする。かれらは、反動的なブルジョアジーの立場に立つて、革命派を圧迫し、異なつた意見をおさえつけ、ブルジョアジーの独裁を実行する。

すでに経験が証明しているように、各部門の文化革命の仕事は、その大衆が自分でおこなうようにすべきであつて、上級機関が一手に引きうけてはならない。一般的な状況のもとでは、上級機関が工作班を派遣する必要はない。上級機関から連絡のために派遣された要員は、「勅使」然とかまえてはならず、また「お着きになるやさつそく」なんだかんだと論議をし、一方の話だけを聞いて先入観にとられるようであつてはならない。(誠意をもつて大衆と接し、大衆と一体となり、よく見、よく聞、よく考えなければならぬ。)

このように空前の規模をもつ文化大革命の大衆運動のなかで、どのようにすれば党の指導を実現することができらうか。各級の党組織が毛沢東思想を行動の指針として、毛主席をはじめとする党中央の定めた正しい路線、方針、政策を真剣に実行し、革命を危くするような誤つた指導を断固として排斥することである。そして、そうするためには、広範な大衆と運命をともにし、呼吸をともにし、大衆のなかから大衆のなかへというやり方をとらなければならない。一部の同志は党の指導を、大衆を思いきつて立ちあがらせることと対立させているが、これはたいへんな誤りである。

正しく、思いきつて大衆を立ちあがらせるには、党の政策を大衆にあたえなければならない。今回の決定が公布されたので、プロレタリア文化大革命についての党のさまざまな政策が直接大衆にふれることになった。これは、思いきつて大衆を立ちあがらせるうえでいつそう有利である。

運動のなかでは、まだ暴露されていないか、十分に暴露されていないブルジョア右派分子を、大衆が徹底的に暴露し、徹底的に批判し、最大限に孤立させるようにしなければならない。そのためには、なによりもまず、資本主義の道をやめむ党内の実権派をとらえること、それのできるだけの確にとらえ、徹底的にあばき出すことが必要である。

大衆は、是非がはっきりしないで動揺している中間派を積極的に獲得しなければならぬことをよく知っている。もちろん、大衆が立ちあがって、自分の部門で大字報をはり出すとき、一部の中間派の人びとの名前をここに書き出すようなこともあるだろうが、これはまぬかれたいことである。だが、新聞紙上に公開的に発表するのではないかぎり、また、かれらに自分を弁護する大字報をはり出すのをゆるすかぎり、かれらを傷つけるようなことがないばかりか、かれらの進歩をうながすことができるであろう。われわれは、運動の過程で、一部の中間派が左派になると信じている。

左派に依拠すること、大衆を広範に立ちあがらせることは、なおさら一致している。左派を発見し、左派の隊列を発展、拡大させ、断固として革命的左派に依拠することに長じてのみ、はじめて、運動のなかで、もつとも反動的な右派を徹底的に孤立させ、中間派を獲得し、大多数を團結させ、運動を経て、最後には九五パーセント以上の幹部を團結させ、九五パーセント以上の大衆を團結させることができるのである。

闘争のなかでは、左派の思想水準と政治水準をたえず高め、かれらが毛主席の著作を實際と結びつけて学び、運用するように援助をあたえなければならぬ。かならず、毛沢東思想で武装した、ひじょうに革命化し、ひじょうに戦闘化したプロレタリア革命派、つまり、しっかりとした左派の隊列をもたなければならぬ。そうしてこそはじめて、文化大革命の勝利をかちとることができるのである。

無敵の毛沢東思想の旗のもとでのプロレタリア文化大革命の勝利万歳！

文化大革命の思想的武器を掌握しよう

『人民日報』社説

(一九六六年八月十一日)

中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定は、わが国の人民大衆に、われわれの偉大な指導者毛沢東同志の声を伝えた。

この決定は、わが国の広範な大衆がプロレタリア文化革命運動のなかで生みだした新しい経験を総括したものであり、かれらの革命的な創意性を反映している。

毛沢東同志はつぎのようにいっている。われわれの政策は、これを指導者に知らせ、幹部に知らせるだけでなく、広範な大衆にも知らせなければならない。大衆は、真理を知り、共通の目的をもてば、心一つにしてやるようになる。大衆の心が一つになれば、なにごとともうまくいく、と。

広範な労働者・農民・兵士大衆、すべての共産黨員、革命的な勤務員、革命的な知識人、革命的な教員・学生は、みな党中央のこの決定を真剣に学ばなければならない。これを熟知し、これに精通し、これを運用しなければならない。決定のなかで規定されている方針、政策と、自分の単位のこゝ一時期の文化革命の状況とを比較、対照して、正しいものはそのままつづけ、誤っているものは断固として改め、まだおこなっていないものはおこ

なうようにしなければならぬ。

二種類の、相反した方針、相反した政策、相反した方法がある。(一)一つは、大衆を信頼し、大衆に依拠し、大衆を思いきって立ちあがらせ、大衆が運動のなかでみずから自己を解放し、教育することができるとを信じ、大衆の革命的な精神と革命的行動を熱情こめて支持するというものである。(二)他の一つは、革命の決定的な時機に、大衆と対立する側に立ち、大衆を抑えつけるというものである。前者は、マルクス・レーニン主義、毛沢東思想の革命的路線を実行するものである。後者は、反マルクス・レーニン主義、反毛沢東思想の誤った路線を実行するものである。

誤った路線にたいしては、断固として排斥し、批判し、闘争しなければならない。こうしてこそ、はじめて正しい路線を貫くことができ、文化大革命を勝利に向かわせることができるのである。

プロレタリア文化革命は、史上前例をみない大革命である。こうした革命がさまざまな阻害する力にぶつからないということはありえない。まさに決定が指摘しているように、「このような阻害する力は、いまのところまだかなり大きく、がん強である」。党中央の決定を貫こうとすれば、どうしても、党内の誤った路線と闘争をおこない、種々さまざまな日和見主義と闘争をおこない、ふるい社会の習慣の力と闘争をおこなわなければならない」といっている。

マルクスとエンゲルスは『共産党宣言』のなかで、「共産主義革命は、伝来の所有諸関係のもつとも徹底的な絶縁である。だから、この革命の発展過程で伝来の観念ともつとも徹底的に絶縁するのは、なんら不思議ではない」といっている。

現在すすめられているこのプロレタリア文化大革命は、ブルジョアジーとすべての搾取階級のイデオロギーをとりのぞくためのものであり、資本主義復活の準備をおこなう旧思想、旧文化、旧風俗、旧習慣を消滅するためのものであり、毛沢東思想をもつとも広範な大衆に掌握させ、社会主義の新思想、新文化、新風俗、新習慣を創造するためのものである。

わが国七億の人民は、党中央の決定——この強力な思想的武器を掌握すれば、かならず、いつそう団結を固め、いく重もの障害をつき破り、天地をくつがえすような力を發揮して、資本主義の道をあゆむ党内の実権派をうち倒し、あらゆる妖怪変化を一掃することができる。

十六カ条を学習し

十六カ条に精通し、十六カ条を運用しよう

『人民日報』社説

(一九六六年八月十三日)

中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定、すなわち十六カ条は、毛沢東同志がみずから中心となって制定したものである。この十六カ条は、大衆を信頼し、大衆に依拠し、大衆を思いきって立ちあげらせ、大衆の創意性を尊重するという基本精神で貫かれている。つまり、プロレタリア文化大革命では、大衆が自分で自分を教育し、自分で自分を解放するしかなく、なにからなにまで一手にひきうけるようなやり方はすべてとってはならないということである。

大衆はわれわれの社会の主人公である。プロレタリア文化大革命は、広範な大衆が自覚して立ちあがり、みずからの手でおこなうことにたよらなければならない。

自分の学校や自分の部門の大衆にたよって、文化革命をりっぱにやりとげることができるだろうか。すべての革命的な教員・学生、すべての革命的な同志はみなプロレタリアートの雄大な志をもたなければならぬ。

みんなが真剣に十六カ条を学習し、十六カ条に精通し、十六カ条を運用すれば、どの学校も、どの部門も、かならず大衆自身の力にたよって文化大革命の勝利をかちとることができるのである。

革命的な大衆運動は巨大な溶鉱炉である。すべての革命的な教員・学生、すべての革命的な同志はみなこの溶鉱炉のなかで試練をうけ、鍛練されて、革命をおこなう能力を身につけなければならない。

革命的な大衆は、十六カ条を把握すれば、文化革命の方向をはっきり見きわめることができ、活動のなかの是非を見分け、今後の行動を正しく按配することができる。われわれは十六カ条にもとづいてこれまでの運動のなかでおこった問題を分析し、判断を下さなければならない。それらのうちどれが正しく、どれが誤りであるか、どのやり方が正しく、どのやり方が間違っているかを見なければならぬ。

文化革命班、文化革命委員会、文化革命代表大会は、大衆が共産党の指導のもとでみずから立ちあがって文化革命をおすすめるための新しい組織形態である。十六カ条の規定にもとづいて、パリ・コンミュニョンのように全面的な選挙をおこなわなければならない。だれを選ぶか、どのように選ぶかは、なん日間かけて大衆が十分に下相談をし、なんどもくりかえし討論しなければならない。選ばれた者もし不適任であれば、改選してもよいし、更迭してもよい。

どの学校、どの部門の革命的な大衆も、主な力を自分の学校、自分の部門の文化革命をりっぱにやりとげること注がなければならない。自分の学校、自分の部門の具体的状況を具体的に分析することを会得し、問題を解決する方法を提起し、実践のなかでみずから経験をつくり出すことは、他の学校、他の部門にたいするもつともよい支援である。どの学校、どの部門の文化革命も、その学校、その部門の大衆が自分でおこなってこそ、それ

を順調におすすりつぱにやりとげることができるのである。われわれは自分を信じるとともに、他の学校、他の部門の革命的な大衆が自分で自分の問題を解決し、自分で自分を解放できるということも信じなければならぬ。

プロレタリア文化大革命は人びとの魂にふれる思想闘争であり、政治闘争である。この闘争は道理を説く闘争でなければならず、暴力をもちいてはならない。真理はプロレタリアートの手にある。ブルジョア右派分子にたいしても、道理を説く闘争をおこなうべきであつて、暴力をもちいてはならない。道理を説く闘争は、ブルジョア右派の醜悪な姿を十分にあばきだし、かれらの誤つた論点を完全に粉碎し、かれらを最大限に孤立させることができる。

十六カ条は毛沢東同志が提起したプロレタリア文化大革命の綱領であり、革命的な大衆が認識を統一し、行動を統一するための指針である。

広範な労働者・農民・兵士、革命的な知識人、革命的な幹部は十六カ条を断固として擁護している。われわれ革命的な大衆は真剣に十六カ条を学習し、十六カ条というこの武器をつかつて、自分の学校、自分の部門の運動の実際状況をはかつて見なければならぬ。そして十六カ条に合っているものはそのままづけ、十六カ条に合わないものは、それを改めなければならぬ。十六カ条をこぼもうとする責任者にたいしては、これを暴露し、批判しなければならぬ。

大海を航行するには舵手にたよる

『人民日報』社説

(一九六六年八月十五日)

わが国の社会主義革命の新しい段階において、プロレタリア文化大革命の発展のうえでカギとなる時点に、毛沢東同志はみずから主宰して党の第八期中央委員会第十一回総会をひらいた。この会議はわが国の社会主義革命の新しい段階を示す里程碑である。

社会主義国家には、生産手段所有制の面での社会主義的改造が基本的に完成した後においても、依然として、どのような道をあゆむかという問題が存在している。社会主義革命を最後までやりぬき、一步一步共産主義に向かつて移行していくか、それとも途中でやめて、資本主義に向かつて後退するか。この問題が人びとの前にするどく提起されている。毛沢東同志は、わが国の革命と国際共産主義運動の正、反面の経験を総括し、くみとつて、この問題に理論のうえで回答をあたえ、実践のなかでこれを次第に解決しつつある。

毛沢東同志は、一九六二年の党の第八期中央委員会第十回総会で、社会主義社会の矛盾、階級、階級闘争についての理論をふたたび強調し、われわれに向かつて、絶対に階級闘争を忘れてはならない、という偉大な呼びかけをおこなった。ここ数年のあいだに、毛沢東同志は、また、社会主義革命と社会主義建設にかんする一連のす

ぐれた決定的意義をもつ政策を提起し、社会主義教育運動とプロレタリア文化大革命にかんする一連の重要な指示をおこない、帝国主義に反対すること、アメリカ帝国主義とその手先に反対するもつとも広範な国際統一戦線を結成すること、現代修正主義に反対すること、世界のすべての被抑圧人民、被抑圧民族の革命闘争を支持することなどにかんする一連の重大な方針を提起した。これらは、わが国のプロレタリアート独裁と社会主義制度を強化し、党と国家の指導権を修正主義に奪いとられるのをふせぎ、資本主義の復活をふせぎ、わが国がプロレタリア国際主義を堅持することを保証するうえでの根本的な問題である。

大海を航行するには舵手にたよる。

毛沢東同志こそ、わが国の革命の偉大な舵手である。

数十年らい、わが国の革命が重要な時点にさしかかるとその都度、たちこめた霧をはらいのけ、航行の方向を正して、われわれの革命の大海を無数の危険な浅瀬や暗礁からさげさせ、さかまく波のなかを、マルクス・レーニン主義の革命航路に沿って、勝利のうちに前進させることができたのは、ほかでもなく党と人民大衆に舵をとってくれる毛沢東同志のような天才的な舵手がいたからであり、偉大な毛沢東思想の指針があったからである。

レーニンは「革命の理論がなければ、革命の運動もありえない」とのべた。まったくその通りである。毛沢東思想がなければ、偉大で、光栄ある、正しい中国共産党はありえず、わが国の民主主義革命と社会主義革命の勝利はありえず、新中国はありえず、またわが国を偉大な社会主義国家にきずきあげることはできず、わが国人民を世界で永遠に立ちあがらせ、永遠に前進させることはできない。

林彪同志は、わが国の革命とわが国の前途にとって、毛沢東思想がこのうえなく重要であることをひじょうに

正しく説明している。林彪同志は、「わが国は偉大なプロレタリアート独裁の社会主義国家で、七億の人口を擁しており、統一した思想、革命の思想、正しい思想が必要である。それは毛沢東思想である」とのべている。

わが国のプロレタリア文化大革命の根本的な任務は、毛沢東思想をもつとも広範な大衆に掌握させ、人の思想の革命化をいっそう促し、精神的力をいちだんと、社会を改造し、自然を改造する巨大な物質的力に変えることである。

われわれは毛沢東思想の偉大な赤旗をさらに高くかかげ、毛沢東同志をはじめとする党中央の周囲にいっそうかたく結集し、党の第八期中央委員会第十一回総会の公報で指摘された各政策の実行につとめ、団結できるすべての人びとと団結し、自力によって立ちあがり、奮起して国の富強をはかり、あらゆる阻害する力と困難を克服し、プロレタリア文化大革命を最後までおしすすめ、社会主義革命を最後までおしすすめ、帝国主義と現代修正主義に反対する闘争を最後までおしすすめよう。

わが国を強大な社会主義国家にきずきあげるために奮闘しよう。

世界諸国人民と団結して、帝国主義のない、資本主義のない、搾取制度のない新しい世界をうち立てるために奮闘しよう。

中国人民の大団結万歳！

世界人民の大団結万歳！

革命的な青少年は

解放軍に学ばなければならない

『人民日報』社説

(一九六六年八月二十八日)

解放軍に学ぼう——これは毛主席が全国の人民に発した偉大な呼びかけである。われわれの革命的な青少年は、党と毛主席のはぐくみのもとに、心から解放軍を愛し、解放軍に学んできた。かれらは、小さいときから、光栄ある解放軍の戦士になろうと志を立てている。

今回のプロレタリア文化大革命のなかで、大学、初級・高級中学校の革命的な青少年は、解放軍を手本として、紅衛兵その他の革命組織をつくった。われわれは、かれらのこうした革命的な行動を熱烈に支持する。

広範な革命的青少年は、この闘争のなかで、いちだんと解放軍に学び、自分を確固としたプロレタリアートの革命戦士に鍛えあげようと決意している。

革命的な青少年は、解放軍のように、永遠に党に忠実であり、毛主席に忠実であり、毛沢東思想に忠実であり、人民の革命事業に忠実でなければならない。だれもが、「毛主席の著作を読み、毛主席の話を読み、毛主席

の指示どおりに事をはこび、毛主席のりっぱな戦士にならなければならない。だれもが、毛主席の著作を實際と結びつけて学び、運用し、運用ということに思い切つて力を注がなければならない。さしあたっては、とくに毛主席の、階級と階級闘争に関する論述、プロレタリア文化大革命に関する論述を真剣に学び、毛主席がみずから中心となって制定した十六カ条を真剣に学ばなければならない。毛主席の指示をすべての行動の指針とし、それを断固つらぬかなければならない。毛主席の指示に合致していれば、われわれは断固としてそれをおこなう。毛主席の指示にそむいていれば、われわれは断固としてそれに反対する。

革命的な青少年は、解放軍の英雄や模範に学ばなければならない。革命戦争と階級闘争のあらしのなかで、解放軍には、董存瑞、黄繼光、雷鋒、歐陽海、王杰、麦賢得、劉英俊など、多くの英雄や模範がすぎつぎと現われた。かれらはみな、革命の實踐のなかで、毛沢東思想を武器として、たえず自分のプロレタリア的自覚を高め、思想を改造して、すべてを人民のため、革命のためにささげるプロレタリア世界観をうち立てた。われわれはこれらの英雄や模範のように、毛主席にしたがい、はげしいあらしのなかで自分を鍛え、自分を成長させなければならない。王杰は、「毛主席のいわれたことなら、わたしはそのとおりにやる」といつている。劉英俊も、「わたしは毛主席のいわれたとおりに仕事をし、自分を確固としたプロレタリアートの革命戦士に鍛えあげる決意を固めている」と語っている。われわれの青少年は、これを共同の努力の目標とすべきである。

革命的な青少年は、解放軍のように、誠心誠意人民に奉仕し、密接に大衆と結びつき、謙虚に大衆に学び、仕事の間で大衆のなから大衆のなかへとという大衆路線を実行し、永遠に人民の忠実な勤務員とならなければならない。紅衛兵とすべての青少年の革命組織は、解放軍を手本とし、断固として毛主席の制定した三大規律八項

注意を實行し、大衆にたいする規律をまもり、人民の利益をまもり、国家の財産をまもらなければならない。

革命的な青少年は、解放軍のように、敢然とたたかい、敢然と革命をおこなわなければならない、巧みにたたかい、巧みに革命をおこなわなければならない。また、闘争の方法に注意をはらい、毛主席と党中央の制定した政策を断固として実行しなければならない。闘争のなかでは、あくまで革命的な左派に依拠し、大多数の人びとと団結し、力を集中して、一握りのきわめて反動的なブルジョア右派分子に打撃をあたえなければならない。

十六カ条は、道理を説く闘争によるべきであつて暴力をもちいてはならない、と指摘している。これは、人民内部の矛盾を処理するうえで適用されるだけでなく、資本主義の道をあゆむ実権派とたたかううえでも適用される。真理はプロレタリアートの手ににぎられており、国家権力もプロレタリアートの手ににぎられている。われわれは道理を説く闘争によつて、資本主義の道をあゆむ実権派をうちくることができ、道理を説く闘争とは、十分に暴露し、深くほりさげて批判することである。道理を説く闘争によつてのみ、例の妖怪變化の反革命的な醜い正体を徹底的にあばき出し、修正主義の根を完全にぬきとり、かれらを徹底的にうちくごき、うち倒し、鼻持ちならないものにするのできるのである。道理を説く闘争によつてのみ、これらの反面の教員を通じて、自分を教育し、大衆を教育し、かれらが大衆のあいだにまきちらした毒素を完全にとりのぞくことができるのである。

革命的な青少年は、泳ぐなかで泳ぎをおぼえ、革命をやるなかで革命をおぼえなければならない。われわれはたえず経験を総括することに長じなければならない。やったことが正しければ、どこまでもそれをやりつづけなければならない。動揺してはならない。経験に欠けていたため、やったことに正しくなかったり、完全には正し

くなかったりしたことがあつたならば、時をうつつさずそれを改めなければならない。そうしてこそ、毛主席のりっぱな学生なのである。

革命的な青少年は、解放軍のように、毛沢東思想の学習にはげみ、毛沢東思想を断固としてつらぬき、毛沢東思想を積極的に宣伝し、毛沢東思想を勇敢にまもり、毛沢東思想によつて自分のすべての行動を導かなければならない。われわれは、毛主席にしたがつて、一生涯革命をやり、一生涯毛沢東思想を学び、一生涯思想を改造しなければならない。

闘争の大きな方向をつかもう

『紅旗』社説

(一九六六年第十二号)

プロレタリア文化大革命は、いま、巨大な赤い奔流のように、搾取階級のさまざまなるい事物、ふるい思想、ふるい習慣の力をつき破り、いく億の人民大衆を教育し、われわれの歴史をおしすすめている。

毛主席はわれわれに、「われわれの敵はだれか。われわれの友はだれか。この問題は革命のいちばん重要な問題である」と教えている。

この問題は、こんどのプロレタリア文化大革命のいちばん重要な問題でもある。

林彪同志はつぎのよりのべている。「われわれは、かならず毛主席の教えにしたがって、だれがわれわれの敵であり、だれがわれわれの友であるかをはっきりと区別しなければならぬ。そして、大多数の人びとと団結し、力を集中して、一握りのブルジョア右派分子に打撃をあたえるよう注意しなければならぬ。打撃の重点、それは党内にもぐりこんだ資本主義の道をあゆむ実権派である。かならず闘争のこの大きな方向をつかまなければならぬ」と。

われわれの各級党组织、広範な労働者・農民・兵士、革命的な幹部、革命的な知識人、広範な革命的青少年

は、かならずこの闘争の大きな方向をしつかりとつかまなければならぬ。もしもこの大きな方向にそむくなら、まちがった道をあゆむようになるだろう。

現段階におけるプロレタリア文化革命のこの大戦役のなかで、力を集中して、一握りのブルジョア右派に打撃をくわえるということは、力を集中して、ブルジョアジーのなかのもっとも反動的で、もっとも頑固な、政治上の代表者に打撃をくわえるということである。ブルジョア右派をたたきつぶせば、ブルジョアジーの反革命的復活の陰謀をおもいきって粉碎することができるのである。

われわれの国家は偉大なプロレタリアート独裁の国家である。われわれの党はマルクス・レーニン主義、毛沢東思想で武装した偉大な党である。このような条件のもとでブルジョアジーが権力を奪いとりうとすれば、どうしても資本主義の道をあゆむ党内のごく少数の実権派、すなわち反革命的修正主義分子を通じなければならぬ。この一握りの反革命的修正主義分子が、もっとも主要な、もっとも危険な敵である。かれらが指導権を乗ったところでは、かれらはブルジョアジーの政策を執行し、ブルジョアジーの独裁を執行している。かれらは、かすめとった権力をつかっつて、ブルジョア右派をかばい、プロレタリア左派を弾圧している。もしもかれらを上り倒さないなら、かれらはブルジョア右派のように、機を見て立ちあがり、われわれの党と国家の指導権を乗っつて、われわれの国家全体を変色させてしまおうであらう。

力を集中して、一握りのブルジョア右派分子に打撃をあたえ、資本主義の道をあゆむ党内の実権派に打撃をあたえること、これが闘争の大きな方向である。この闘争の大きな方向をしつかりとつかめば、悪質分子が火事場ドロ棒をきめこむのを防ぐことができ、われわれが闘争のなかで二次的な問題にとらわれて主要な目標を見のが

すというような誤りをさけることができる。

プロレタリアートの実権派か、ブルジョアシーの実権派か、そのどちらかである。抽象的、超階級的な実権派などというものはありえない。プロレタリアートの実権派は支持すべきであり、かれらを支持するのは、資本主義の道をあゆむ実権派をうち倒すためにほかならない。資本主義の道をあゆむ実権派はうち倒すべきであり、かれらをうち倒すのは、プロレタリアート独裁をさらにうち固めるためにほかならない。

われわれの国家はプロレタリアート独裁の国家である。根本的にいって、実権をにぎっているのはプロレタリアートである。党、政府、軍隊の各部門でも、工業、農業、商業、教育、軍隊の各界でも、指導工作の責任をもつ各級の幹部は、一般的な状況のもとでは、その大多数が党を擁護し、毛主席を擁護し、断固として社会主義の道をあゆんでいる。かれらは十六カ条のなかの第八条でのべている第一、第二の部類に属する幹部である。党と国家の指導的地位をかすめとった反党・反社会主義・反毛沢東思想の反革命的修正主義分子は、ほんの一握りにすぎない。それが、十六カ条にあげている第四の部類である。

これは、わが国の政治生活に客観的に存在する基本的な事実である。だからこそ、われわれのプロレタリアート独裁の政権は強固なのである。だからこそ、わが国では、毛沢東思想の偉大な赤旗を高くかかげて、社会主義革命と社会主義建設の各戦線できわめて輝かしい勝利をかちとることができるのである。

林彪同志は、つぎのように指摘している。一握りの反動的なブルジョア分子、まだよく改造されていない地主分子、富農分子、反革命分子、悪質分子、右派分子は、「プロレタリアートをはじめとする広範な革命的な人民大衆のかれらにたいする独裁に反対し、わがプロレタリアートの革命的な司令部を砲撃しようとしている。われ

われは、かれらがそうするのを許すことができるだろうか。できない。われわれはこれら妖怪変化の陰謀論計を粉碎し、かれらを見やぶらなければならず、かれらの陰謀を表現させてはならない。」

われわれプロレタリアートの革命的な司令部を砲撃しようとするくらゐ妖怪変化は、ほんの一握りにすぎないが、かれらは、ときには真相を知らない一部のよい人びとをだますこともできる。だが、われわれが毛沢東思想の照魔鏡にうつしてみさえすれば、かれらはすぐに自己の正体をあらわし、党と毛主席を熱愛する広範な大衆の包囲のなかにおちこんでしまうのである。

プロレタリア文化大革命の目的は、けっしてすべての指導的幹部と闘争することでもなければ、大衆と闘争することでもない。どのような口実をもうけようと、また、どのような方法をとろうと、革命的積極分子に打撃をあたえたり、大衆をそそのかして大衆とたたかわせたりすることは、絶対に許されない。

プロレタリア文化大革命の大衆運動のなかでは、大衆のあいだに異なった意見が存在するということはありうるし、ときにははげしい論争さえもありうるのである。大衆のあいだの異なった意見と論争にたいしては、大衆のなかの誤った意見をもふくめて、みな、毛主席の人民内部の矛盾を正しく処理する原則にもとづいて適切に解決しなければならぬ。

『中国共産党中央委員会のプロレタリア文化大革命についての決定』は、つぎのようにのべている。

「人民内部の矛盾か、それとも敵味方の矛盾かという性質のちがった二種類の矛盾を厳格に区別しなければならぬ。人民内部の矛盾を敵味方の矛盾にしてはならないし、敵味方の矛盾を人民内部の矛盾ととりちがえてもならない。」

人民大衆のあいだに異なった意見が存在すること、これは正常な現象である。いく種類かの異なった意見のあいだの論争は、避けられないことであり、必要なことであり、有益なことである。大衆は、正常で十分な討論をとうじて、正しいものを確認し、誤ったものを是正し、しだいに一致していくようになる。

討論のなかでは、事実をあげて、道理を説き、道理によって相手を納得させる方法をもちなければならぬ。異なった意見をもつ少数のものにたいしても、圧力をかけて押えつけるようなやり方をとることはすべて許されない。真理が少数のもの手にあることもあるのだから、少数のものでも保護する必要がある。少数のものの意見が誤っているとしても、かれらに弁明を許し、自分の意見を留保するのを許すべきである。」

毛主席がみずから中心となって制定したこの決定を、われわれ一人ひとりの革命的な同志は真剣に実行しなければならぬ。

プロレタリア文化大革命は、人びとの魂にふれる大革命である。この偉大な大衆的な革命運動は、どうしても人びとの魂の奥底にあるさまざまな問題にふれることになる。こんどの運動は、われわれ広範な幹部と大衆にとって偉大な社会主義教育である。四旧がうち破られて、四新がうち立てられ、革命的な気風が全国に急速にひろまっていくということ、これはひじょうにすばらしいことであり、深い意義をもっている。すべての革命的な同志は、これを熱烈に歓迎し、断固支持しなければならず、革命の烈火のなかで自覚的に自分をきたえあげ、毛主席の教えにもとづいて真理を堅持し、誤りを正し、大衆の批判にたいしては「誤りがあればこれを改め、なければいっそう気をつける」という態度をとらなければならない。

運動全体についていえば、われわれは主要な矛盾と重点をしっかりとつかみ、主要な矛盾と一般的な矛盾との

関係を正しく処理しなければならない。人びとの作風上の一般的な欠点や誤りは、こんどの文化大革命運動のなかで自覚的に改められなければならないが、これを運動の重点とすべきではない。この種の問題を解決するには、やはり人民内部の矛盾を正しく処理する方法をとらなければならない。われわれは、説得と教育をおこなひ、単純化や粗暴なやり方を防がなければならない。われわれは、敵味方の矛盾を処理する方法で作風上の一般的な欠点や誤りの問題に対処してはならず、また、われわれの闘争の大きな方向がかきみだされまいよう、この種の問題を運動の主要な闘争目標としてはならない。

プロレタリア文化大革命は、偉大な、怒とりのような階級闘争である。この闘争は鋭く、複雑であつて、しかも、そこには曲折と反復がありうる。われわれは、この点を十分に見ておかなければならない。われわれが運動の大きな方向をしっかりとつかみ、階級闘争の観点と階級分析の方法で、運動のなかにあられるさまざまな問題、さまざまな矛盾に対処し、随時、経験を総括しさえすれば、かならずこの偉大な革命闘争を一步一步と勝利のうちに前進させることができるのである。

中国の社会主義文化大革命（第七集）

1967年 初版発行

定価 40 円

出版者

外文出版社
(北京阜成門外百万莊)

発行者

中国国際書店
(北京 P. O. Box 399)

編号: (日) 3050-1573

3-J-719P
00020

